『今東光全年譜』刊行後の新収事項・書誌、訂正一覧

（編年式。河出年譜記載の作品でその後実見したものを含む。データは2024年3月26日現在。ゴシック体はそれ以降の新収・訂正事項で9月20日現在のデータ。なお下巻1088〜1094ページ所収の補遺・訂正事項は除いている）。

2025年1月以降の新収事項・書誌、訂正等については◎を付して区別した。

・凡例6ページ5行目の最初の句点を削除。

◎・1908年5月27日の項の信巳の多磨霊園改葬日は、1930年6月27日が正しい（今家旧蔵信巳遺影背面書き込みにより判明）。

・1914年4月の項の『文章世界』読者通信にある「若林旅二郎」は後の童話作家大木雄二（本名雄三）の当時の筆名（『回想 文士の決闘』依拠）。

・1917年1月3日　日本郵船香取丸でケープタウンに向けて欧州航路を航海中の父・武平から東光・文武宛に年賀カードが到来（※宛先住所記載なし）。

・1918年6月の「須藤泣花について」の項で以下を追記。須藤について東光は「幻視の画家関根正二補遺」の中で、上海の開業医の息子で早稲田大学文科に通う学生だったと紹介。須藤は関根の頼みで関根の代表作「信仰の悲しみ」のモデルとなった田口真咲を本郷真砂町の自宅に預かった、と記している。

・1920年2月14日　野口米次郎の招きで日本滞在中だったアイルランド出身の詩人ジェイムズ・カズンズ（3月28日離日）、鈴木大拙、ジョン・ブリンクリー、『ポンベイ・クロニクル』紙特派員サバルワル、そして父・武平ら21名で神智学協会東京支部を設立。カズンズ離日後は鈴木が支部長を務めた。なお武平は同年10月同支部会計職を辞職、同支部も1923年には消滅したという（『アイルランド神智学徒のアジア主義？ジェイムズ・カズンズの日本滞在（1919—1920）とその余波』橋本順光、『神智学とアジア』吉永進一、荘千慧ら編、青弓社）の記述に依拠）。ブリンクリーについては上巻240ページ上段を参照のこと。東光とブリンクリーは1920年当時から面識があったと思われる。

・1921年8月26日午前、近衛直麿（当時『象徴』同人）を伴い鈴木彦次郎の盛岡の実家を訪問、投宿。27日朝、弘前へ。東光は『新思潮』が第4号発行（この年7月）以降、刊行の見込みがないことから「再興」案を種々提案、9月発行をもちかけた（実際の第5号は1922年3月発行）。

・1923年12月25日の項の松蘿閣には藤沢清造、大木雄二も同所に居住、東光は大木を通じて萩原恭次郎を知ったという（『回想 文士の決闘』）。

・1925年9月発表の随筆『愛妻物語』その他」の題名は『愛妻物語』其他」が正しい。

・1926年5月小説「海の饗宴」（若草）。

・1926年6月　妻・文子と伊勢志摩を旅行。「同行に今井氏兄弟あり」（鳥羽の海）。

・1926年（月不詳）短文「鳥羽の海」（誌名不詳）。

・1927年1月1日随筆「新聞小説と『愛経』」（出版タイムス）。

◎・1927年11月随筆「私から見た草間實」（阪妻画報）。

・1927年か　連載評論「一九二六年から一九二七年へかけての感想」（紙名不詳—全2回）発表。「一九二三年の九月、関東の大震火災直後の数日、芥川龍之介氏と僕と川端康成君と三人で、その被害状況を視察し歩いた時に、芥川氏は浩然と嘆じて、日本人は家康入国と少しも進歩してゐない。（中略）魂は慶長以後幾何も経ってゐないやうだと語ったことがある」（第2回）。

・他に1927年発表と思われる作品は、連載評論「プロ文学論に就いて」（紙名不詳—全3回）、評論「迷へる文学」（紙名不詳、同年8月以降の発表か）、回

答「(十五歳以下の少年に活動写真をみせしめない禁止法案について)」(婦人公論)、短文「自分の顔」(誌名不詳、同誌36ページに掲載、「金氏一平」作の似顔絵あり)。

・1928年発表と思われる作品として短文「無題録」(誌名不詳、同誌75ページに掲載)、短文「竹の賦」(誌名不詳、同誌109ページに掲載)がある。

・1929年発表と思われる作品に随筆「近代婦人の種々相」(紙名不詳)、連載随筆「随想四則」(紙名不詳—全4回)がある。

・1930年発表と思われる作品に連載随筆「私の出家に対する非難に答へて」(中外日報—全3回※西澤隆二が11月5—7日付の3回にわたり同紙に東光の出家を論評、その反論文)、評論「農村の若き友へ—盆踊に就いての考察」(紙名不詳、「新聞いはらき」か)、評論「農村の友へ送る第二の信書」(紙名不詳、「新聞いはらき」か)がある。また参考回答「(短信)」今文子(誌名不詳、顔写真入り)がある。

・1931年4月19日評論「槐樹社展小評」(九州日報)※同展は4月18日から同29日まで福岡市内で開催。東光は現地に赴いたかもしれない。

・1931年5月1日評論「一つの提案」(小学校新聞)「東光改メ今戒光」名。

・1931年10月1日随筆「東光から春聴へ」(晃聖)春聴名。「私は筆硯を清めて、熊崎先生に私信を呈した。私は、私の新生涯に向ふに『春聴』といふ新しい『衣服』を頂いた。私は直にそれを法名とした。同時に妻も亦、泰乃と改名して頂いた。」。

・1931年10月回答「宗門学校はどうなるか」(仏教生活)戒光名。

・1931年12月11日連載小説「明暗の街」最終回(新聞いはらき)「作者附記」があり「東光改メ春聴」と記載。

・1931年発表と思われる他の作品に評論「人柱お伽羅について」(新聞いはらき)題字は東光、背広に輪袈裟姿の写真あり(「四日金曜日」の表記のみ記事枠外で確認可能)、随筆「お伽羅物語」(紙名不詳)、評論「一仏教徒の道 仏教マルクシズムの展開」(紙名不詳)、評論「仏教青年連盟に就いて」(紙名不詳—全2回か。文中に連盟の役職として主事今戒光 書記長三輪悌三、賛助員として内務大臣安達謙三、民政党総務中野正剛、代議士後藤亮一、風見章、簡牛凡夫、渡辺泰邦、松浦武夫、三浦虎夫、政友党総裁犬養毅、鳩山一郎、安藤正純、犬養健の名を列挙している)、連載評論「時評らしく」(紙名不詳—全4回)がある。

・1932年4月随筆「僧房から」(反響第11号※宇都宮で講演の後、日光に輪王寺門跡を訪ね、昼食を共にしたと随想)。

・1932年5月1日評論「現代救済策について」(日本仏教新聞)。

・1933年6月の『宗団意識』の項に下記を追記。同誌は1936年3月の第31号までは発行確認済み。同人は東光の他、井上恵行、硲慈弘、奥村全応、梅田円鈔、福井康順、坂戸智海、山村光敏、林亮天、奥田慈応、田村貫雄、山本照順、信楽真純、落合寛茂。

・1933年12月17日の項の出典の『宗団意識』は1934年1月が正しい。

・1933年12月の『宗団意識』発表作「総括的に」は1934年1月発表が正しい。

・1933年冬以降 比叡山滞在中に土田杏村から「天台イデオロギーについて共に研究したい」との書簡到来(「マルクスのイデーと天台のイデー」下)。また「同人今春聴は入山以来戒蔵院に如法な生活をしてゐる。講演にラヂオに忙しく宗団の宣伝にはもつて来いである」(『宗団意識』1934年1月発行第7号編輯後記)の記述も残る。

・1935年3月9日 東京施無畏講懇話会第54回例会(如水会館)で「仏性」を講演。他の講師に清水谷恭順ら(午後6時から)。

・1935年3月24日連載随筆「マルクスのイデーと天台のイデー—我善坊に

て」（教学新聞―25、27日全3回）連載第1回で「麻布の我善坊に移り住んだのは先月末のことである。」とあり、同所への転居は2月末と記述している。

・1935年3月30日夜、加藤勘十の渡米送別会（新宿・白十字）に出席（「我善坊から」）。

・1935年3月随筆「一徒弟の感想」（施無畏講月報第14号）。

・1935年5月頃　新興仏教青年同盟東京支部発会式（小石川・妙清寺）に出席、顧問に就任。※東光が同盟と関わるのは1931年頃で、後に自身が提唱・設立した「仏教青年連盟」と「同盟」との合流を委員長妹尾義郎に申し入れたが実現しなかった等の記述が江口信順の随筆「なつかしい今さん」（中外日報1961年12月26日付）にある。

・1935年発表と思われる他の作品に連載随筆「我善坊から」（教学新聞か―全3回。連載第2回目で妹尾義郎の「新興仏教青年同盟」について評価する記述あり。同名の随筆が『中外日報』にあるが別内容）、評論「宗教文学の流行　鬼に喰はれて了へ」（紙名不詳）がある。

・1936年1月か　連載評論「教団の自己批判としての公開状」（紙名不詳―全2回か）※落合寛茂の安楽寺住職就任経緯を詳述。

・1936年4月17日　落合寛茂の安楽寺晋山式（―18日）。

・1936年発表と思われる他の発表作品に随筆「鬼怒川堤」（「新聞いはらき」か、春聴名）、随筆「日本的タルチュフー真理運動寸感」（紙名不詳、春聴名）がある。

・1940年5月頃　鹿児島出身の作家古木鐵太郎がペンネームを古木鐵也に改名。東光が命名したという。なお1947年9月頃、鐵太郎に戻した。

・1942～3年か　メモ「東亜運命共同体私案」（未定稿、200字詰め10枚）「東春吉」名。

・1945年以前か　未定稿「運命に就いての若干の考察」（400字詰め10枚）春聴名。

・1948年9月10日　この日、弟・文武宅を訪問、田中英光の近況について文武の妻・勝代に相談。

◎・1948年10月20日　この日、尾崎士郎が飛田給の東光宛に書簡。「年を同じくし、性格にいささか似かよひたるものあり、共に叛骨を病んで今日に到った。君の二十年間が必ずしも空白でなかったということはこれからの十年間にわかるでせう。僕はひそかにそれを期待する。二十八日は必ず一時までにゆき」と書き送る。

◎・1948年12月14日ごろ　尾崎士郎と面談（12月25日差出の尾崎速達書簡）。

・1948年秋か　『歴史小説』発刊記念講演会（上野池之端・市民文化会館）に高柳光寿、舟橋聖一、辰野隆と登壇。講師の一人だった坂口安吾は無断欠席する（「忘れられない作家＝坂口安吾の新盆によせて」）。

・1949年8月『日本ユーモア』発表題名は「調布奇譚」、掲載号も8月号が正しい。

・1951年4月小説「怪盗暗闇祭り」（面白講談）。

・1952年8月19日の演奏会は八尾市職員組合主催、ビゼー「アルルの女」、ベートーベン「運命」など5曲が演奏された（『八尾市時報』63号）。

・1953年4月12日時評「新興宗教の地盤」（産経新聞朝刊）「春」名。

・1953年5月11日の八尾文化人連盟常任理事会は初理事会だった。理事には東光の他、古藤敏夫、天野作太郎、西岡三四郎、三栖元、樋口雪峯、沢井浩三の7人が推薦される（『八尾市時報』81号）。

◎・1953年6月7日　この日、尾崎士郎が東光宛に書簡。「小生は健康あまりよろしからず。小生が万一のことありたるときは必ず君によって一生の終末を全うしたし。よろしくタノム」と記した。

・1953年8月評論「天台院小史」は東大阪新聞「河内史談」に連載された。
・1953年9月30日随筆「三岸節子氏への手紙」（新日本美術新聞）。
・1953年12月3日の項、音楽会は「井口基成門下生演奏会」と思われる。
・1953年12月31日随筆「林武論」（新日本美術新聞）。
・1953年（月日不詳）随筆「ドガとマネーと女性」（新日本美術新聞）※フジカワ画廊開館記念展を記述。
・1953年発表と思われる他の作品に随筆「ルオーという画家」（紙名不詳）がある。
・1954年1月1日随筆「一九五四年頭感」（東大阪新聞）。
・1954年1月31日評論「津高和一論」（新日本美術新聞）。
・1954年2月随筆「大阪管見」（福助）。
・1954年2月22日随筆「狂気の芸術」（産経新聞朝刊）※東光の手で切抜きに訂正。正しい題名は「狂喜の芸術」。
・1954年3月25日の項、独唱会は太田美津子独唱会。
・1954年3月28日　江口信順に葉書差出。「今日、妹尾義郎さんからも御便りを頂きました。大いに御奮闘を蔭乍ら慶祝しております。小生は漸く教団に愛想を尽かして仕舞い、実は仏教革新の熱が無くなりました。寧ろ折角、別の角度から何か働きたいと考えて居ります」（「なつかしい今さん」『中外日報』1961年12月26日付）。
・1954年4月随筆「大阪の味」（味）。
・1954年7月2日談話「四法律施行『七月一日』への二つの意見」（国際新聞）※もう一方の談話は末川博。
・1954年9月20日　この日の梅田画廊訪問は「三岸節子滞仏作品展」（―27日）参観か。
・1954年10月21日随筆「一僧侶の感想」（北國新聞朝刊）。
・1954年11月29日談話「門跡は奇形児」（大阪新聞※一条尊昭尼の出奔記事内に収録）。
・1954年12月3日　この日の一業クラブでの講演は、そごう5階特別室で午後2時半から「易を語る」を題に開かれた。
・1954年発表と思われる作品には随筆「河内の美女」（紙名不詳、春か）、随筆「彼岸」（紙名不詳、夏か）、随筆「私の本だな　文学、仏教、歴史など手当り次第」（産経新聞か）、随筆「らくがき雑談　鬼怒川の鮭」（紙名不詳）、推薦文「（三岸節子展）」（梅田画廊案内葉書）、随筆「コンコルドの広場（三岸節子滞仏作品展）」（新日本美術新聞）、随筆「松方コレクションに就て」（紙名不詳、年末か。東光名）がある。
・1955年3月27日談話「本と私」（毎日新聞朝刊）。
・1955年4月21日　天台大師千三百五十年御遠忌のため檀家と延暦寺へ。
・1955年5月10日推薦文「八木一夫の作品」（梅田画廊「八木一夫・新陶展」はがき）。
・1955年5月26日連載随筆「聖人の追放者―続『罪と罰』」（中外日報―29日全4回）※4月22日の安楽寺全焼に文中で触れている。
・1955年6月2日談話「愛と信仰の生活を」（紙名不詳。記事「人間復活の元尊昭尼　平松陽子さん」内に収録）。
・1955年6月14日随筆「月曜随想　美女発見」（大阪日日新聞）※橋本昭子について記述。
・1955年6月26日　三岸節子が長男黄太郎を伴いパリから帰国。海路神戸港に帰着。
・1955年7月随筆「忘れられない作家＝坂口安吾の新盆によせて」（紙名不

詳）。

・1955年7月11日　中外日報用座談を収録（大阪・西区「とよ春」）。

・1955年7月17日座談「宗教放送は如何にあるべきか」（中外日報―19日全2回）他に中山太一、福田定一、吉田秀映、西野日渓、森剛、鬼内仙次、金子千丈、岡本博美、清水洪、中瀬尹ら計12名。

・1955年夏か　神戸・みなと祭りを見物（本多沛亭と一緒の写真掲載雑誌が残る）。

・1955年9月以降　随筆「共力者三栖元君」（東大阪新聞か）。

・1955年10月推薦文「『世阿弥に取憑かれた五年』の実績」滝川駿『世阿弥』（大学書房）所収。

・1955年10月5日か　随筆「わが青春記　なつかしい悪夢」（紙名不詳、紙齢4726号）。

・1955年10月29日　第二回京都仏教徒会議（大雲院仏教会館）で「仏教の現代化」を講演。

・1955年11月2日　後に東光と親しく交わる八尾市職員三上幸寿が市会事務局次長から広報課長に異動。三上は『八尾市時報』1956年1月5日号から1958年4月20日号まで編集兼発行人を勤め、東光に対する八尾市による文化表彰の記事などを掲載した（『八尾市時報』169号）。

・1955年11月7日評論「仏教教団の生きる道」（毎日新聞朝刊）。

・1955年11月14日　後に東光と深く関わる殉国青年隊隊長豊田一夫を警視庁が逮捕。容疑は銃砲刀剣類等取締令違反容疑。1954年12月16日に全国指名手配されていたがこの日出頭。この事件では豊田の秘書丸山毅、同隊組織部長鈴木兼光、同隊戸畑支部副隊長大元良一も検挙された（讀賣新聞朝刊11月15日付）という。

・1955年11月27日連載随筆「夜鬼庵随筆」（文化時報―全2回）※連載第1回で夜起庵と夜鬼庵についてわずかながら記述。

・1955年11月以降　評論「エルサレムは遠い　私の政治批評」（産経新聞か）。

・1955年12月2日対談「師走舌戦　ネオンの街」万代峰子（産経新聞朝刊）。

・1955年12月3日　「直枉」発刊1周年記念仏教思想大講演会（午後5時から、相愛学園講堂）で「一仏教徒の感想」を講演。他に金子大栄、安部大悟。同誌は八尾・観智坊に事務所を置いた仏教思想研究会が発刊。

・1955年12月3日　小説「河内狸」（新関西）。

・1955年12月8日　堺・徳泉庵で午後2時から講演。この日同庵に「禅餘会」が発足。

・1955年12月13日　この日収録の朝日放送ラジオの二元放送出演。他に小倉敬二、渡辺紳一郎。番組は同月18日午後11時から30分番組の「多元放送　ボーナス談義」か。

・1955年12月13日　この日の讀賣新聞朝刊「東西南北」欄の「観光道路（河原盤）」は東光の作かもしれない。

・1955年12月18日　この日午後1時からの大阪文学会について『讀賣新聞』同月15日付朝刊「よみうり抄」では「大阪文学会『明日』例会」と表記。会費50円とある。

・1955年12月発表と思われる作品は短文「三岸節子小感」（三岸節子滞仏作品展御案内）、評論「日ソ国交恢復にあたつて」（紙名不詳）※12月13日の番組出演に触れる。

・1955年発表と思われる作品に随筆「別格寺の廃止」（中外日報か）、随筆

「ある尼僧のため」（紙名不詳）、随筆「おんがく随筆」（誌名不詳）、対談「浮気の倫理　第4話」坂本嘉江（紙名不詳）、短文「私の好きな涼線地帯　生駒山」（紙名不詳）、短文「警官の教養を」（大阪新聞）、談話「わたしの道楽」（紙名不詳）、談話「人間あっての戒律サ　〝門跡破戒〟は片腹痛い」（紙名不詳）、推薦文「（無題）」（『大阪方言事典』推薦文）、随筆「河内人情」（紙名不詳）、短文「秋に愛誦する」（紙名不詳、西行の歌を紹介）、随筆「真実について」（大商）がある。また参考「文壇すぽっと　今氏の関西弁被害譚」（大阪新聞）、記事「私の新婚時代　おノロケ拝聴　今東光氏　きよさん」（紙名不詳）、参考記事「すなっぷ帖　三岸節子の占い」（紙名不詳）がある。

・1956年1月　この項にある畑重嘉は後に、純具象美術協会会員。

・1956年1月14日　この日の徳泉庵での講演は禅餘会行事で午後1時から同4時までの予定だった。

・1956年2月14日　この日の徳泉庵訪問は禅餘会行事での講演。27日に死去した母・あやの追善供養も行った。

・1956年2月28日談話「寛容の態度に敬服」（大阪新聞）※記事「捕えた学校ドロを帰す」中に掲載。

・1956年4月12日連載随筆「東西南北」（讀賣新聞朝刊）の東光執筆確定分は以下の通り。4月12日「女にモラルがあるか」26日「露出症」5月5日「女の社会的モラル」27日「笑っていられるか」、7月（文化欄が夕刊に移行）17日「評論と小説」7日「反語的に」8月17日「閨房小説」、掲載日不明の「静かなる革命」。※2013年10月の調査で右記コラムを貼付した東光旧蔵の切抜集が出現した。また複数の筆者が同一筆名で執筆していたことも確認（讀賣新聞朝刊1955年11月18日付「東西南北こぼれ話」欄では執筆者と推定される4名が実名で執筆）。

・1956年5月か　随筆「慈雲尊者」（易学研究）。

・1956年7月4日評論「読者の会議室　観光税について」（中外日報）。

・1956年7月か　随筆「大峰山を女性に開け」（中外日報）※讀賣新聞夕刊7月2日付の記事を引用。

・1956年8月9日　この日付『中外日報』連載社説の題は「結論を出せ」が正しい。

・1956年8月19日か　評論「茶道の古典について」（第二回夏期茶道教養講座プリント）。

・1956年10月推薦文「現代人は古典への道を歩め」（茶道古典全集刊行の言葉）。

・1956年11月1日　武部善人が藤本義一らを伴い東光を訪ねたことは、武部が信濃武のペンネームで刊行した『小説　河内エレジー』（1991年、光文社）に記載がある。

・1956年11月16日談話「宗門が生んだ破壊者　延暦寺放火・こう考える」（讀賣新聞朝刊）。

・1956年11月18日『中外日報』連載の社説タイトルは「悪の都大阪市」に訂正。

・1956年12月11日　朝日放送で、東京との二元番組の収録後、梅田画廊での三岸好太郎・黄太郎の「父と子の展覧会」へ。黄太郎と面談。

・1956年12月28日随筆「天台院の鐘」（紙名不詳、文化欄）。

・1956年発表と思われる他の作品は随筆「さる歳」（大阪新聞）、随筆「大阪の女性像」（大阪新聞）、随筆「供養とは」（中外日報か）、随筆「戦犯論」（中外日報か）、随筆「重光外相」（紙名不詳）、談話「日ソ交渉に望む⑥」（紙名不詳）、随筆「親鸞」（紙名不詳）、回答「悩みに答える　一度は母子心中図る」（大阪新

聞）、随筆「宗教的暴力」（中外日報）がある。

・1957年1月1日随筆「三岸黄太について」（新日本美術新聞）。

・1957年1月1日座談「50年後の宗教」（中外日報）天文学者山本一清、福見涙草、他2名。

・1957年1月24日随筆「悪運つよく　直木賞を受けて」（讀賣新聞夕刊）。

・1957年1月26日記事「訪問　老女の厚化粧さ　隠しきれぬ受賞の喜び」（紙名不詳）。

・1957年1月か　随筆「直木賞を受けるとは」（中日新聞、朝夕刊不明）。

・1957年2月18日随筆「天台院の早春」（紙名不詳、夕刊か）。

・1957年2月20日刊行の『お吟さま』は当初、淡交社から出版されたが、同年4月1日付出版契約書（上巻306ページ掲載写真参照）では契約者が東光と淡交新社（社長千政興・後の15代宗室）となる。その経緯について淡交社社長納屋嘉治は、淡交社社員が自社の偽造手形を使った大刑詐欺事案を起こしたため編集・出版業務を肩代わりする淡交新社が発足した、と説明、さらに「丁度、今東光先生のお吟さまが直木賞を受賞され、これから、その出版も大々的にやろうとしている、いわば、一つの節ともなる時であっただけに、これはこたえました。」（『日本の伝統文化を現代に生かす出版』『オール関西』1971年3月号）と語った。

・1957年2月か　談話「科学の時代に逆行するもの」（紙名不詳）。

・1957年3月10日談話「インフレ悪循環の恐れ」（讀賣新聞朝刊）※「あす集中スト」記事内に収録。

・1957年3月19日随筆「大阪の橋」（讀賣新聞夕刊）。

・1957年4月15日談話「第三の教室　マス・コミの中のこどもたち」（朝日新聞夕刊）。

・1957年4月序文『小序』『涙骨抄』（中外出版社）。

・1957年7月随筆「一日所長雑感」（ひらけゆく電気）※同誌は関西電力発行。

・1957年7月、日不明随筆「ハダカがよろし」（毎日新聞、朝夕刊不明）。

・1957年7月4日参考「時の人　青山圭男」（毎日新聞朝刊）。

・1957年7月13日随筆「このごろの若いものは」（毎日新聞朝刊）。

・1957年9月17日評論「既成宗団への警鐘　政治には深入りするな」（紙名不詳）。

・1957年9月29日随筆「原作の精神を伝える　『どん底』を見て」（産経新聞夕刊）。

・1958年4月14日座談『知識の宝庫』十九万円の質問』（ラジオテレビニッポン）※タブロイド紙。他に三国一朗、酒多博（新日本放送プロデューサー）、一般出場回答者3名。

・1958年4月15日の項、人形劇は「大阪国際芸術祭　ザルツブルグ人形劇団公演」。

・1958年10月7日回答「どうすれば現状を収拾できる？」（サンデー毎日・緊急増刊アンケート）。

・1958年11月28日談話「祝皇太子御婚約　女性にはドエライ、ニュース」（中外日報）。

・1958年11月29日　この日付『ハワイ・タイムス』に記事「破門に動ぜぬ今東光和尚」が出たとコラム「なべ　今和尚の破門？と宗門法規」（中外日報12月28日付）が紹介。

・1958年秋「関西ものがたり」（上方情緒　趣味の手帖第9号〈秋季号〉）※1957年4月の「関西ものがたり」と別内容。

・1959年1月1日随筆「宗教界の民主化へ」（中外日報）※「本社社長」の

肩書で掲載。

・1959年1月13日連載随筆「東光万華経　説法はわが命」（中外日報―5月23日全29回）※毎週火曜・土曜連載。

1回衣生活、2回食生活（17日）、3回やりくり（20日）、4回住（24日）、5回政治（27日）、6回長髪（31日）、7回葬式（2月3日）、8回経済（7日）、9回世襲（10日）、10回説教師（14日）、11回文書伝道（17日）、12回電波伝道（21日）、13回宗門大学（24日）、14回次男坊（28日）、15回予言（3月3日）、16回宗教映画（7日）、17回宗教と映画（10日）、18回宗教音楽（14日）、19回仏教音楽（17日）、20回声明（21日）、21回お逮夜市（25日）、22回庶民（31日）、23回仏教画（4月4日）、24回壁画（7日）、25回大僧都になって（28日）、26回身の上相談（5月5日）、27回現代人とは何か（15日）、28回仕事は美人を作る（21日）、29回ものごとを正しく知れ（23日＝最終回）。

・1959年1月21日の和田完二との対談は『証券知識レポート』4月9日号用。

・1959年1月23日談話「特集　法衣」（中外日報）。

・1959年1月23日参考「洋服法衣の普及」江口信順（中外日報）。

・1959年2月4日参考「著作権　知らぬが仏」（中外日報）※角笛欄。

・1959年3月2日　牧村史陽らが来宅、『観光の大阪』用対談収録。

・1959年3月対談「今東光さんの大阪観光放談」牧村史陽（観光の大阪）。なお文末に「（次号には大阪弁と喰べものについて）」とあり、次号にも続編掲載の可能性がある（未見）。

・1959年4月9日対談「和田完二氏に聞く」和田完二（証券知識レポート）。

・1959年4月9日対談「本当の心のやりどころ」福田千里（証券知識レポート）。

・1959年4月18日談話「当るも当らぬも・・・易のすべて」（大阪日日新聞）。

・1959年5月29日随筆「退社の辞」（中外日報）。

・1959年7月1日の「ハダカ風土記」は正しくは「今東光のヌード風土記」が正式名称。OSミュージックの開館5周年記念豪華公演と銘打たれ、東光は構成を担当した花登筐と共に演出も手掛けた。

・1959年7月18日の六甲山訪問は「経営学者夏季研修会」（関西能率技師協会主催）での講演のため。

・1959年7月発表の「回想　文士の決闘」（新潮）については、改題前の原稿「決闘介添人」（45枚）がある。本文内容は同一ながら原稿1枚目に「新潮6月号」のゴム印が押されているほか、同誌が旧字旧かなづかいを用いたため、そのように修正する指示書きが欄外に残されている。

・1959年9月6日連載随筆「東光人間経」は『北海タイムス』日曜版にも掲載された。全38回で18、19、32～36回のタイトル不明。初回には「序にかえて」が掲載され、37回タイトル「この世相」、第38回（最終回）タイトルが「黙秘権」。

・1959年9月23日　東映ニュース第5号放映。番組内の「東映クイズ」コーナーで東光の飼っているミミズクが紹介される。

・1959年12月15日の金沢訪問では石川トヨペットにも立ち寄った。

・1959年か　随筆「刺繍について」（大阪刺繍商工業務協同組合機関誌「刺しゅう」）。

・1960年8月11日の宝塚訪問は星組公演「華麗なる千拍子」「山びと」観劇のため。

・1960年8月17日の京都・都ホテルでの講演は、大阪の化粧品会社「セブンツーセブン」の代理店組織である全国セブン会の第6回総会で行った。

・1960年9月28日の山一証券の会の正式名称は「ご婦人のための山一M・I・講演会」。演題は「女性雑感」。

・１９６０年９月７日　文藝春秋講演旅行（文化講演会）講師には菊村到も参加。
・1961年3月8日の丸善石油高等工学院訪問は同校の第3回卒業式出席のため。
・１９６１年３月 22 日　東映ニュース第 84 号放映。同月実施された全逓労組のストについて東光のコメントを収録。撮影は3月 18 日か。
・1961年8月4日の講演は正しくは、兵庫県三木市で開かれた三木市婦人夏季大学講座で講演した。他の講師に神戸地方裁判所判事の江上芳雄。
・1961年8月13日のフランキー堺、森光子との座談はラジオ番組内でのこと。
・1961年9月3日の「金龍会」は正式には「金龍会創立10周年記念式典」で、東光は講演した。
・1962年5月3日参考「美女教師が今東光を告訴した！　小説『愛染時雨』のモデルと作者の華やかな争い」（週刊実話特報）
・1963年2月15日参考「文芸レンズ32 河内風土記（今東光）」（アサヒグラフ）。
・1963年6月対談「よろめき説法」池内淳子（地上）。
・１９６３年９月 25 日　東映ニュース第 216 号放映。「天ぷら店で株主の作家今東光や数江夫人らと懇談する藤永〈元作〉さん」収録。撮影は同年8月 20 日の「稲菊」訪問時か。
・１９６３年 10 月の「みみずく和尚と青年社長」（経済サロン）は座談。出席者は奥村綱雄（野村証券会長）、佐治敬三（サントリー社長）、秋山利郎（東洋精糖社長）、藤田一暁（藤田組社長）、藤森真（美鶯商会社長）、坂田時人（坂田商会社長）、赤井和夫（ＹＰＯ事務局長）。※タイトルは「みみずく」と表記。
・１９６４年８月 13 日の項の「電通」は夏季広告電通大学での講演かもしれない。『広告研究　昭和 39 年版』（同年 12 月刊）に東光の講演の抄録「女性の購買心理について」がある。
・1964年12月9日「日本近代文学書展」がいづみ書店で始まる（―18日）。その展観タイトルを東光が墨書で揮毫。
・1965年3月26日の東光の誕生会に出席した極真会館関係者は館長大山倍達の他は、中村忠、加藤重夫、芦原英幸、落合茂、松永秀夫、スティーブ・アニール、ピーター・マクレーンだったという。
・1966年1月随筆「利生の銭」（若い11　第45号）※同誌は名古屋テレビ放送が発行。
・１９６６年３月 26 日　東光の誕生日。辻久子、神坂次郎、牧野十三男、板倉克、吉田秀映・冨美子夫妻らが参集。
・１９６６年３月 30 日　東映ニュース第 347 号放映。「陸奥の毒舌和尚」収録。中尊寺での東光の読経映像などを撮影。
・1966年5月1日の項から本書に計6度登場する「三浦四郎」は三浦義四郎が正しい。登場箇所は下巻人名索引を参照されたい。誤記については天台寺住職菅野宏紹氏にご指摘いただいた。
・1966年9月25日刊行の『東光毒舌経　おれも浮世がいやになったよ』には帯に松本清張の短文「毒舌経を推薦する」が掲載された。
・1966年9月、上巻582ページ下段の対談「なまぐさ対談」は「なまぐさ対談」が正しい。
・1966年ごろ　湯川れい子と週刊誌で対談（詳細不明）。
・1967年1月5日短文「幼な馴染」『画業50年記念　東郷青児展』カタログ（1月5日―11日、東京・銀座松屋）。
・１９６７年１月 14 日の項、ロッテ友の会の副題は「名士の話を聞く会」。
・１９６７年８月２日の講演は「第 17 回高松市夏季大学講座」内で実施（高松市主催）。演題は「人生雑感」、午後7時 15 分から同8時半まで。
・１９６７年９月 25 日参考「参院選出馬が招いた今家の波紋」（週刊文春）。文

中で「檀家には大事な議題のときには死ぬなといってある。だいたい芸術院会員になって、小説がかけんなんていうのとはどだいデキがちがうわ」と発言。

・1967年随筆「味と香」（スエヒロの味第4号）。

◎・1968年2月28日の「今東光を励ますタベ」には小林米三（財界）、関牧翁（宗教界）、司馬遼太郎、湯木貞一（吉兆主人）、池田蘭子、蔭山幸夫（笹川春二代理）、木本一馬（日本土地社長）、中村吉子（河童経営）、日野ひろし（後に東光の背広を数多く仕立てる。山田直也の友人）らも出席した。

・1968年6月19日東映ニュース第463号放映。選挙運動中の東光を撮影。

・1968年7月10日東映ニュース第466号放映。東光の当選風景、川端康成の映像などを撮影。

・1968年8月7日東映ニュース第470号放映。東光の参議院初登院映像。

・1968年10月23日東映ニュース第481号放映。川端のノーベル賞受賞に関連して東光の選挙映像が放映される。

・1969年10月5日　この日訪問の「サロンたしろ」及び同月17日訪問の「田代サロン」はいずれも博多駅前の「ステーキサロンたしろ」のこと。『東光ばさら対談』所収の田中小実昌の回で「今先生に最初にお目にかかったのは福岡でしたね。博多のステーキハウスみたいなとこのオープンのときに」（田中）とあることからこの10月5日のことと思われる。この店について東光は同対談で「ストリップの親父の店だわな」と語り、実際『産経日本紳士年鑑』（1970年版上巻）掲載のステーキサロンたしろの広告には系列事業として東洋ショー劇場などの紹介もされている。

・1970年1月10日　帯評「日本人の陰影をみる」『曠野』今村了介（まほろばの会）※同書は印刷を日青印刷が担当（日本青年連盟関係者が経営）。

・1970年1月12・19日　談話「各界50氏　創価学会への直言」（週刊文春）。

・1970年1月12・19日　推薦文「無題」（週刊文春）※記事広告「この人と一週間〈坪内寿夫〉」内で掲載。

・1970年5月2日の名古屋言作は前日の1日に吾妻らと中尊寺を訪問に訂正。

・1970年11月15日　泉佐野ロータリークラブ主催の講演は泉佐野市民会館で午前10時から開会。

・1971年3月、下巻717ページ下段のチラシ「世界クラシックカーフェスティバル」への掲載内容は推薦文。同フェスティバルは3月5日東京で開催。その後、名古屋、大阪と巡回した。

・1971年4月6日　この日面談の秦良澄とは福井県足羽郡所在の西蓮寺住職。

・1973年3月20日　東京行きの機内で〝大日本どケチ教教祖〟吉本晴彦と乗り合わせ、その場で吉本から著書『どケチ商法』が贈られる。

・1973年8月20日　愛知県知多郡の内海特定郵便局が「開局百年局舎落成記念」切手帳を発行。「国宝を訪ねて」のページに中尊寺金色堂と同寺華曼を図柄とした二種の切手を貼付し「中尊寺貫主　今春聴」の直筆署名（印刷）を添えた（他に日光東照宮宮司、華厳宗管長らも掲載）。

・1973年12月1日短文「（内容目録本推薦文）」『選挙の実際』林間（今東光を中心とする東光会）。

・1974年2月17日談話「東光和尚毒舌も復活　褌を締めねぇ日本人野郎」（夕刊ニッポン）。

・1974年7月25日　「伊藤眞乗」の表記については『今東光香奠帳』（和綴じ全2冊）で2か所において使用されていることから準拠した（以降、同）。

◎・1974年10月28日記事「ザ・チャレンジャー《行動する顔》第8回　安斎慶子」（平凡パンチ）に東光のインタビューあり。東光はそのなかで、安斎には離婚経験があ

り、双子の二児を持つ母親であることを明かしている。

・1974年12月22日　三木睦子が東光宛に夫・武夫（当時総理）の近況報告の書簡を執筆、差出。

・1975年8月30日の次項記載の『蓮華』刊行時期は正しくは、1976年7月7日。本補遺の1976年7月7日の項、参照。

・1975年11月27日の項、天台宗ハワイ別院では昼食を、ホテルでは別院開設二周年記念夕食会が開かれた。

・1976年3月18日　宮内庁御料牧場から山田栄一宛に東光命名の比内鶏十大軍鶏（本光奴）百羽の発注がある（4月13日納品）。

・1976年4月推薦文「人柄と技にホレた」『秘伝極真空手』大山倍達（日貿出版社）。※東光には名誉3段の注釈付。

・1976年7月随筆「生きてゐる鈴木彦次郎」（月刊街）。※文中「彼（鈴木のこと）が一高生になった初一年の学期はじめ、同級の川端康成、石浜金作、酒井真人等と共に僕の家へ来て以来、」と1917年9月のことと受け取れる記述があるが、詳しくは上巻71ページを参照。

・1976年7月7日　日蓮正宗大石寺内事部が『蓮華』臨時号、特集「今東光氏の妄説を破す」を刊行（非売品）。内容は下巻807ページの通りだが、藤川信澄の論文題名は「極道辻説法の訛言を笑う」が正しい。全編にわたって「週刊プレイボーイ」6月22日号を批判、6月18日、28日と二度にわたり法主日達が同号を問題視していたことが伺える。

・1977年3月1日の項で、斎藤清がビッグヒル新社の社長だったと記述しているが1977年時点の社長は氷川佳助。同社は菊田一夫プロダクションPR部が発展、1965年（昭和40）に発足した。

・1978年8月10日『東光金蘭帖』（1959年）を文庫化、中央公論社から刊行。弟・日出海が「解説」を書き下ろしで寄せたほか、日出海の三女・栞子の夫吉田克朗がカバー絵を担当した。吉田は1943年9月生まれ。多摩美術大学で学び斎藤義重の指導を受けた。当初は造形作家として活躍したが後に版画制作に軸足を置き、1973年からは文化庁海外芸術研修生としてイギリスに滞在。1999年9月死去。1971年、同じ大学出身の栞子と結婚した（下巻702ページ上段参照）。なお同ページで媒酌人を「佐藤義重」と記述したが正しくは「斎藤義重」。

・1985年1月の項、山本富士子寿初春公演の初日は、2日。他の共演者に天知茂、島田正吾、小山明子ほか。

・2023年1月24日　『古寺に行こう24　中尊寺』（小学館）に参考「古寺人物往来　今東光」が掲載される。

・2024年6月　石川近代文学館が『西村賢太旧蔵資料目録』を刊行、東光の色紙2点、短冊1点を収録。

・下巻921ページ最後の行、1871年は1971年が正しい。

・下巻922ページ2行目ペール・ラシェーズが正しい。

・下巻923ページ5行目（暦は、哥麿が正しい。

・下巻984ページ　作品一覧「霊道人礼賛」が欠落。1963年11月初出。

・下巻巻末　人名索引「今官一」の項の参照ページ表記のうち、649は誤りで649が正しい。

【時期不詳発表原稿等】

・短文「佐渡の旅」大阪の駿河屋亘伝葉書裏面（1960年代か）。

・短文「地獄讃」（別府地獄組合リーフレット）※下巻876ページ上段の「ようこそ『地獄』へ」と同内容か（1960年代か）。

・短文「（推薦文）『古代風俗五態　小町人形第一回頒布会』パンフレット（1960年

代か)。

・短文「(推薦文)」チラシ『ルールドA』※健康ドリンクで日本産業が発売。

・短文「本を読むべし」(平河出版社の宣伝文)。

◎・漢幸雄氏所蔵の資料から、東光が1932年(昭和7)8月ごろに転居した東京中野・塔ノ山の正確な住所は塔ノ山15、と判明した(1933年(同8)1月5日付消印、山本幸一宛年賀状)。また同じく漢資料の山本幸一宛1937年(同12)1月5日付消印の東光差出喪中葉書では、差出住所が渋谷区穏田の住所となっていることが新たに分かった。この資料の出現により東光が穏田に転居した時期は少なくともこの葉書差出時点にまでさかのぼることとなり、本書では「1937年3月ごろには穏田に転居」としたが「1937年1月には穏田に転居する」に訂正する。

(了)